

# 「えみし」社会の成立と倭国

女 鹿 潤 哉

はじめに

国史によれば、新潟県を含む東北地方七県の北半から道南西部にわたる地域には、古代の倭国・日本側によってエミシ・エビスなどに呼称・

認識された「えみし」が居住し、倭国・日本側に抵抗したとされる。

「えみし」社会は、畿内大和を拠点とする前半期古代国家に位置付け得る倭国が国土の統合を推進していった時期には、既に成立していたと考えられる。即ち、東北北半城の文化や社会が、古代を通じて道南西部のそれとわがち難く結びついていることを積極的に評価すれば、そうした現象の嚆矢をなす北海道起源の後北C<sub>2</sub>・D式土器が東北北半城広範に出現した時期こそは、「えみし」社会の成立期として位置付け得るもので、暦年代の四世紀前半を中心とする時期にあてられる。

また、「えみし」社会は、弥生時代後期における倭人社会の政治的統合、その結果、西日本を中心として成立する邪馬台国連合が東日本をも傘下に組み込み、倭国へと変貌を遂げる過程に對極をなす形で成立し、古代を通じて倭国・日本社会と對峙することになる。小論は、一連の旧稿をふまえた上で、「えみし」社会成立へと至るいくつかの画期と倭人

社会、並びに倭国側の動向との関連について考究するものである。

## 一 東北北半城への後北C<sub>2</sub>・D式土器の広範な展開

弥生時代終末期く古墳時代前期の頃、北海道縄文時代半ば過ぎに位置付けられる後北C<sub>2</sub>・D式土器（以下「C<sub>2</sub>・D式」に表記する）が、津軽海峡を越えて新潟県域を含む東北七県に出現し、就中青森・岩手県、秋田・宮城両県北部を中心とする東北北半城広範に展開する。後北式土器は、元来、道央を中心とする地域の土器であり、「C<sub>2</sub>・D式」に先行する後北C<sub>1</sub>式土器（以下「C<sub>1</sub>式」、先行の土器群も同様に表記する）の時期に全道への展開が始まる。「C<sub>1</sub>式」は、道南を中心に道南西部に及んだ恵山式土器、道東部を中心とする興津式・下田ノ沢式土器、道北を中心とする宇津内式土器群などに伴う地域性を有する文化圏を同化していき、後続する「C<sub>2</sub>・D式」期には、全道を齊一化するとともに東北地方、並びに南部樺太・南部千島にまで拡散したのである。

東北地方出土の後北式土器は「C<sub>2</sub>・D式」を主体としており、先行する「C<sub>1</sub>式」は青森県北部や新潟県の一遺跡に限定され、それに先行

する「B式」の本州側への展開は、青森県九叟泊遺跡と秋田県内ノ岱遺跡などで類例がわずかに指摘されるに過ぎない<sup>(8)</sup>。また、「C<sup>2</sup>・D式」に後続する北大I式土器（以下「I式」に表記する）は、引き続き全道に展開するものの、南部樺太や南部千島にはみとめられず、東北北半域でも、ほぼ宮城・山形両県域を南限とするなど展開域、遺跡数ともに縮減しており、「C<sup>2</sup>・D式」は広域的、かつ広範な展開を示している。

新潟県西山町内越遺跡では、竪穴住居の埋土から新しい段階の「C<sup>1</sup>式」が畿内弥生時代後期の指標とされる第V様式期末の土器に併行している<sup>(9)</sup>。一方、北海道側では、在地土器である「C<sup>1</sup>式」「C<sup>2</sup>・D式」と弥生時代後期東北北半域起源の天王山式土器群（以下「天王山式」に表記する）、及びそれに後続する赤穴式などの「天王山式」系の土器群（以下「赤穴式」に表記する）との共伴、併行事例が報告、指摘されている。札幌市K一三五遺跡四丁目地点など、道南西部を中心とする「C<sup>1</sup>式」「C<sup>2</sup>・D式」との共伴関係から、「C<sup>1</sup>式」が弥生時代後期の「天王山式」、ないしはそれに直続する土器群に、「C<sup>2</sup>・D式」が「天王山式」に後続する「赤穴式」土器群に併行するとされる<sup>(10)</sup>。

以上をふまえると、概ね、「C<sup>1</sup>式」は、東北地方の「天王山式」期後半に併行するとともに、畿内第V様式終焉から程なく「C<sup>2</sup>・D式」へと移行して「赤穴式」に併行したことになる。また、「C<sup>2</sup>・D式」は、東北地方古墳時代前期の土師器「塩釜式」との併行、共件事例も知られている。「C<sup>2</sup>・D式」を中心とする年代想定については、旧稿で論じたので詳述はしないが、以下、未検討の資料も含めて、東北北半域における「C<sup>2</sup>・D式」を中心とする北海道系土器と「赤穴式」「塩釜式」との

共伴、併行事例について略述する。なお、「C<sup>2</sup>・D式」の編年については、大沼編年に拠るものとする。

「赤穴式」との共伴、併行事例」

① 秋田県能代市寒川II遺跡

六基の土壙墓群中の五基から「C<sup>2</sup>・D式」が出土し、このうち二基で弥生土器と共伴<sup>(11)</sup>、弥生土器のうち、羽状捺糸文を有する十王台式系の壺は、「赤穴式」後半の特殊捺糸文段階に位置付け得るとされる<sup>(12)</sup>。また、同遺跡出土の「C<sup>2</sup>・D式」は大沼編年の所謂「一般的なC<sup>2</sup>・D式」段階のもの<sup>(13)</sup>とされる。

② 岩手県軽米町大日向II遺跡

「C<sup>2</sup>・D式」は遺構外の出土ではあるが、周辺からは、同様の施文をもつ後半期の弥生土器が出土するなど、該期との併行関係が強く示唆されている<sup>(14)</sup>ことから併行例に加えた。この「C<sup>2</sup>・D式」は「一般的なC<sup>2</sup>・D式」とみられるから、既述した寒川II例とほぼ同時期の「赤穴式」特殊捺糸文段階に併行すると理解される。

③ 岩手県九戸村長興寺I遺跡

後北・北大式の文化系統に伴う葬送伝統の一つである袋状堀込みをもつ土壙一基の埋土中から、「C<sup>2</sup>・D式」片一点、「赤穴式」甕四点、管玉三点、鉄製品一点が出土した。袋状堀込みからは小振りの甕が一点、主体部分から「C<sup>2</sup>・D式」を模して三角形の刺突を口縁部に施した甕が一点、その上層からは、甕二点とともに、「C<sup>2</sup>・D式」片が出土している<sup>(15)</sup>。「C<sup>2</sup>・D式」片には、文様構成や施文にやや繁縷な面が残るものの、共伴した赤穴式のうち一点には、退

化傾向を示す交互刺突文の名残がみとめられ、「赤穴式」四点は、ともに撚糸文を主体としており、特殊撚糸文段階とみられる。このことから、本例もまた、寒川Ⅱ・大日向Ⅱ遺跡出土例と同様、「一般的なC<sup>2</sup>・D式」の中に位置付け得るものと考ええる。

「土師器との共伴、併行事例」

④ 岩手県盛岡市永福寺山遺跡

土壙墓から出土した「C<sup>2</sup>・D式」は、関東地方古墳時代前期の五領式相当の土師器に共伴したとされ、その後、「C<sup>2</sup>・D式」が中段階、土師器が「塩釜式」新段階にあり、両者は共伴、もしくは併行するとされる<sup>(21)</sup>。本例も、「一般的なC<sup>2</sup>・D式」に位置付け得る。

⑤ 青森県五所川原市隠川(一一)遺跡

「一般的なC<sup>2</sup>・D式」「塩釜式」、方割石が土壙墓とみられる遺構から出土し、三者は平面的なまとまりを示しており、共存していた可能性が高いとされること<sup>(22)</sup>から併行例に加えた。共伴した「塩釜式」は、古段階の後段に位置付け得るとされる<sup>(23)</sup>。

⑥ 岩手県滝沢村大石渡V遺跡

土壙墓とみられる遺構から出土した「C<sup>2</sup>・D式」片が後半期の「塩釜式」に共伴したとされる<sup>(24)</sup>。

⑦ 宮城県石巻市新金沼遺跡

比較的残りの良い「C<sup>2</sup>・D式」が、竪穴住居跡から最古段階の「塩釜式」に共伴した<sup>(25)</sup>。既述した大日向Ⅱ遺跡出土例と器形や微隆起線の特徴が類似しており、「一般的なC<sup>2</sup>・D式」と考える。

⑧ 宮城県多賀城市山王遺跡

SX〇五八遺構出土の「C<sup>2</sup>・D式」片が、「塩釜式」の特徴を残す東北地方古墳時代中期の土師器「南小泉式」古段階に共伴した<sup>(27)</sup>。

⑨ 宮城県築館町伊治城跡

SD二六〇・二六一溝跡から「I式」の深鉢、及び口縁部、底部の破片が後半期の「塩釜式」に共伴し、列点刻文の刻みが楔形を呈する底部破片は「C<sup>2</sup>・D式」の可能性もあるとされる<sup>(28)</sup>。この事例は、終末期の「C<sup>2</sup>・D式」が古手の「I式」の一部を伴う形で後半期の「塩釜式」に共伴したものとする指摘もある<sup>(29)</sup>。

東北北半域出土の「C<sup>2</sup>・D式」は、大半が「一般的なC<sup>2</sup>・D式」であり、それらは、「赤穴式」後半の特殊撚糸文段階(寒川Ⅱ・長興寺I例)、ないしは「塩釜式」(永福寺山・隠川(一一)・新金沼例)に共伴、ないしは併行している。こうした事実は、弥生時代終末期の「赤穴式」特殊撚糸文期と古墳時代前期塩釜式期のある時期とが併行することを示している<sup>(30)</sup>。また、大石渡V・山王・伊治城跡出土の「C<sup>2</sup>・D式」が「塩釜式」後半、「南小泉式」初頭に併行するとすれば、「C<sup>2</sup>・D式後葉」、ないしは「C<sup>2</sup>・D式末」に位置付けられる可能性が強い。

さらに、「C<sup>2</sup>・D式」に後続する「I式」は、概ね「南小泉式」併行で、五世紀を中心とする位置付けがなされている。「I式」と「南小泉式」との併行関係は、北大構内ボプラ並木東地区、青森県天間林村森ヶ沢遺跡<sup>(31)</sup>・八戸市田向冷水遺跡<sup>(32)</sup>、秋田県西目町宮崎遺跡<sup>(33)</sup>、山形県鶴岡市山田遺跡<sup>(34)</sup>などでの共伴事例からも疑う余地はない。

以上を総合的に理解すれば、山王例は、終末期の「C<sup>2</sup>・D式」が「南小泉式」期初頭まで残り、伊治城跡例も、後半期の「塩釜式」の一

年代 AD	北海道 縄縄文土器	東北北半城 弥生土器	東北南半城 外來土器・土師器	畿内 (参考)
1世紀後半   100-				
2世紀前半   150-		天王山式古(交互刺突様浮線文)段階		V様式
2世紀後半   200-	後北C <sub>1</sub> 式	天王山式新(交互刺突文)段階		
3世紀前半   250-				庄内式 (古段階)
3世紀後半   300-	「C <sub>2</sub> 式初」段階	赤穴式古(退化交互刺突文)段階		庄内式 (新段階)
4世紀前半   350-	「一般的なC <sub>2</sub> -D式」段階	赤穴式新(特殊襷糸文)段階	前塩釜式段階 (辻編年I期)	
4世紀後半   400-	「C <sub>2</sub> -D式後葉」段階		塩釜式古段階 (辻編年II期)	布留式 (古段階)
5世紀前半	北大I式		塩釜式新段階 (辻編年III期)	布留式 (中段階)
				布留式 (新段階)

想定される暦年代

図版 1

部が後世まで残り、溝が埋まる過程で終末期の「C<sub>2</sub>・D式」と出現期の「I式」とに共伴したと解するのが自然である<sup>11)</sup>。

また、東北北半城において、「赤穴式」や「塩釜式」と共伴、ないし併行関係が指摘された「C<sub>2</sub>・D式」の大半は、「一般的なC<sub>2</sub>・D式」とみられることは既に述べた。このことが単なる偶然とは考え難く、遺構外出土例をも含めた全般的傾向を示すものと思われる。既述したように、「C<sub>1</sub>式」以前の後北式土器群の東北北半城への展開が、極めて稀薄

であることをふまえると、東北北半城においては、「C<sub>2</sub>式初」についても、ほとんどみとめられず、広範な展開を示すのは「一般的なC<sub>2</sub>・D式」以降の個体ではないかと思量されるのである。

以上の共伴、併行関係に加え、畿内第V様式と東北地方「天王山式」の開始年代がほぼ併行するとみなすとともに、小山田による畿内第V様式の年代観などをふまえ、改めて、上の想定暦年代を提起したい<sup>12)</sup>。そして、東北北半城は、「一般的なC<sub>2</sub>・D式」が広範に出現したとみられる「赤穴式」後半の特殊襷糸文期、並びに併行する「塩釜式」前半期、即ち四世紀前半を中心とする時期に、北海道後北文化圏との関係を深めていくことを確認しておく。

## 二 東北北半城における後北・北大系文化要素の性格

東北北半城出土の「C<sub>2</sub>・D式」は、北海道のものとは区別し得ないものが多いことから、北海道から搬入されたか、搬入した集団が在地の生産に直接関与したとされる<sup>13)</sup>。また、既述した永福寺山遺跡出土の「C<sub>2</sub>・D式」には、胎土の違いにより、北海道から搬入されたものと在地生産されたものとが存在する可能性が指摘されている<sup>14)</sup>。それでも、既述した遺存状況が良好な大日向II、新金沼遺跡出土の「C<sub>2</sub>・D式」深鉢は、北海道のものより器高が高く、文様構成もやや異なるように思われ、前者は同様の施文手法による後半期の弥生土器と併行していると思われるから、在地集団によって生産されたものと理解される。

また、既述した長興寺I遺跡出土の「C<sub>2</sub>・D式」の口縁部を模した

土器は確実に在地生産されたもので、この土器が中・下部文様帯をも忠実に模倣していれば、在地生産の「C<sub>2</sub>・D式」とみなすべきものとなる。すると、東北北半域における「C<sub>2</sub>・D式」や「I式」には、他にも在地生産されたものが存在していると考えるのが自然であり、該期の東北北半域にあつて、土器を始めとする北海道後北・北大系文化要素を 수용した主体は、在地集団だつたことが明確となる。既述したように、東北北半域出土の「C<sub>2</sub>・D式」は、「赤穴式」特殊燃糸文段階、ないし「塩釜式」に相伴しており、東北北半域が北海道後北文化圏との関係を深めるのは、概ね四世紀前半を中心とする時期とみられる。

一方、東北北半域出土の「塩釜式」は、専ら東北南半域の土器編年で理解されることなどから、直接には関東地方などから進出した勢力<sup>(14)</sup>を含む東北南半域、ないしは同北半南辺にあつた集団が深く関与した文化伝播によつて将来されたと考へる。既述したように、東北北半域における「赤穴式」後半と「塩釜式」前半のある時期とが、概ね併行するとみられるものの、これまでに両者の明確な共伴事例は報告されていない。このことは、東北北半域の弥生時代終末期と東北南半域以南の古墳時代前期前半とが併行する四世紀前半を中心とする時期、東北北半域において「赤穴式」を用いた在地集団の主体は、東北南半域を中心として「塩釜式」を用いた集団と系統を異にしており、両者は、当初、ほとんど交渉をもたなかつたことを示唆している<sup>(15)</sup>。

「C<sub>1</sub>式」→「C<sub>2</sub>・D式」期の後北文化による全道の斉一化は、元來、石狩・苫小牧低地帯（以下石狩低地帯に表記する）などを境として南西部と北東部に大きく二分されてきた北海道の文化圏を、一つのより大

きな文化圏（以下、「拡大文化圏」に表記する）に統合する結果となつた。「I式」以降の北海道北大式土器群は、概ね六世紀代の「II式」を経て、七世紀代には「III式」を初期型式とする擦文土器様式へと移行する<sup>(16)</sup>。その後、後北・北大文化の系統に連なる擦文文化は、道北東沿岸部におけるオホーツク文化、及びその擦文化によつて成立したトビニタイ文化、さらには中世初期（王朝期）の日本文化の影響をこうむるなどして、一二〜一三世紀には、北海道擦文文化圏、並びにそれと密接な関係にあつた東北北辺でアイヌ文化へと変貌を遂げたと理解される<sup>(17)</sup>。

アイヌ文化を担つた集団、即ちアイヌは、近世の時点で、北海道を中心として、北は南部樺太や千島列島などから、南は津軽・夏泊・下北半島などの東北北辺にわたつて居住していた。すると、アイヌ文化圏は、千島列島で北に拡張し、東北北半側で北に縮小する形で、「C<sub>2</sub>・D式」が展開した地域、即ち「拡大文化圏」にほぼ重なる。こうしたことから、「C<sub>2</sub>・D式」が広範に展開した地域は、概ね後世のアイヌ文化圏に連なる性格を有していたものと理解され、「拡大文化圏」成立の嚆矢をなした「C<sub>1</sub>式」→「C<sub>2</sub>・D式」期こそは、アイヌ文化形成にむけた胎動期として位置付け得る。「I式」期以降、「拡大文化圏」の要素がみとめられなくなる南部樺太と千島列島のアイヌは、擦文終末期→アイヌ文化成立期に「拡大文化圏」側から進出した集団が、オホーツク文化を担つた集団の末裔などを同化する過程で成立したと理解される<sup>(18)</sup>。

東北北半域から道南西部、就中東北北半域から道南にわたる地域は、縄文時代以降、弥生時代中期に至るまで、概ね共通性の高い文化圏（以下、「共通文化圏」に表記する）を構成してきており、そうした共通性

は、土器を始めとする物質文化にとどまらず、価値観や信仰などの精神文化面にまで及んでいる。<sup>(3)</sup>北海道「拡大文化圏」は、「C<sub>1</sub>式」〜「C<sub>2</sub>・D式」期、結果として旧「共通文化圏」北半域(道南西部)と道北東部諸文化圏との融合により生じており、「C<sub>2</sub>・D式」の広域的展開こそは、南部樺太・南部千島、東北北半域をも「拡大文化圏」側に組み込もうとする性格が内在していたと理解される。<sup>(4)</sup>そして、東北北半域を中心とする「C<sub>2</sub>・D式」の広範な展開は、該地域が「拡大文化圏」南域に再編される形で、道南西部とともにあった旧「共通文化圏」の伝統を継承する性格をおびた動きとしても解し得る。<sup>(5)</sup>

### 三 倭人社会の政治的統合と古代国家倭国の成立

「C<sub>2</sub>・D式」が東北北半域広範に展開する時期は、弥生時代後期後葉〜古墳時代前期にあたる。弥生時代後期は、西日本を中心とする倭人社会の政治的統合が劇的に進む激動の時代であり、環濠集落の発達、高地性集落の出現、青銅・鉄製武器の発達などからは、戦闘の多発・激化に伴う社会的緊張状況がみてとれる。また、特定個人を厚葬する墳丘墓や周溝墓、並びに副葬品である大陸系の鏡や青銅・鉄製武器などは、富の偏在や階級分化が一層進んだ状況を如実に示している。さらに、同期の西日本に出現した祭祀具などを共有する地域圏は、後期にはさらに顕在化し、九州北部・四国南部などに広形銅矛・銅戈を、吉備などに特殊器台・特殊壺を、畿内を中心とする地域に近畿式銅鐸を、東海西部などに三遠式銅鐸を共有するより広域的な政治勢力が成長していく。

中国史書『漢書』には、一世紀初頭前後の多数のクニの分立状況や前漢への定期的な朝貢記事「地理志燕地」が、『後漢書』には、倭の奴国や倭国王帥升の朝貢と後漢による冊封、「倭国大乱」など一〜二世紀の状況が見え「東夷伝倭」、倭人社会の政治的統合は、中国王朝の権威を借りることによっても拍車がかかった。中でも、「倭国大乱」は、『後漢書』に先行して成立した『三国志』魏書東夷伝倭人(以下、『魏志』に表記する)の「倭国乱」に対応するもので、『後漢書』は桓帝(一四七〜一六七)と霊帝(一六八〜一八八)の治世の間とし、『梁書』は「漢霊帝光和中、倭国乱」に作り「諸夷伝倭」、一七八〜一八三年の間のこととしている(『北史』も同じく作る)。

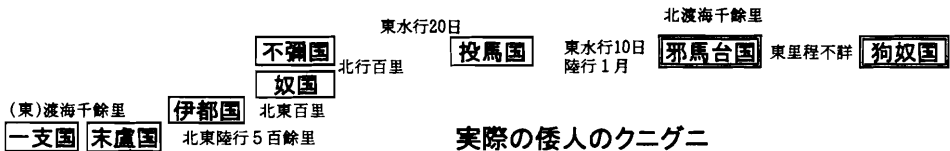
『後漢書』が『魏志』に拠り、『梁書』『北史』が両者を参照したものであるにせよ、『魏志』の記述は、『魏略』の生の史料を伝えているとみられるから、「倭国(大)乱」は二世紀後半の史実であったと考えられる。そして、『魏志』の記述に従えば、こうした倭人社会の戦乱は、三世紀初頭までに女王卑弥呼を「共立」することによって収束し、邪馬台国を盟主とする三〇のクニの連合体(以下、邪馬台国連合に表記する)が成立する。こうして、弥生後期倭人社会の政治的統合の結果、古代国家形成への歩みは一層加速していくのである。

また、『魏志』によれば、弥生時代終末期の倭人社会は、邪馬台国連合を構成するクニ、それに敵対する南の狗奴国、さらに邪馬台国の東方にもクニがあつて「皆倭種」とされる。今日、邪馬台国の位置については、畿内庄内式土器の西日本を中心とする地域への広域的展開、初現期古墳の成立や三角縁神獣鏡の分布状況などから、畿内大和にあつたこと

は確実とされ、邪馬台国連合は「倭国（大）乱」が収束する二世紀末には、畿内を中心とする西日本広域にわたったこととなる。<sup>(57)</sup>

一方、邪馬台国連合と抗争し得た狗奴国についても、同時期の遺跡の規模や数、東海系土器や前方後方墳墓など東海系要素の東漸などによって濃尾平野、ないしは弥生時代後期の菊川式土器の展開、「久努」の地名や豪族「久努連」他との関連から遠江東部など、東海西部にあてられる見解が有力である。すると、東海西部にあったとされる狗奴国の地理上の位置は、邪馬台国の南ではなく、実際には概ね東だったことになる。このことについて、『魏志』には、倭を現在の浙江省から福建省にわたる「会稽」「東冶」の東とみなすなど、倭が南にのびる島であるとする認識があったとして、編者の方位観は、地図上の日本列島を不正確にゆがませて南方に九〇度転回させたものとなるとする指摘があり、狗奴国を大和北東の東海西部とする見解ともほぼ整合する。<sup>(58)</sup>

倭種の国



実際の倭人のクニグニ

図 版 2

『魏志』の記述からは、編者の認識として、邪馬台国連合を構成する三〇のクニや狗奴国を倭人のクニとみなしていることが容易に読みとれ、邪馬台国東方にも「倭種」、即ち「倭人系」のクニがあるとされている。すると、既述した『魏志』編者の方位観を修正すれば、「倭種」のクニは、実際には邪馬台国の東ではなく、北を中心とする位置付けとなるから、倭人社会の範囲は、大和の北東方、即ち東日本方面にも広がりをもっていたことが明らかとなる。当時の関東・甲信地方など東日本には、狗奴国勢力の影響のもとに展開したとされる東海系土器や前方後方墳の墳墓など東海系要素が広範に及んでいる。<sup>(59)</sup>

やがて、東海西部で成立した前方後方墳は、三世紀前半には関東南部に出現するとともに関東各地に波及し、北陸・関東・甲信地方などの東日本では、中小規模の前方後方墳が畿内に起源する前方後円墳に先行して出現する事例が各地で見られる。すると、「倭種」のクニとは、北陸・関東・甲信地方などの東日本広域をも含むものだったことになる。その後、邪馬台国連合は、三世紀半ば過ぎには東海西部を拠点とした狗奴国を始めとする東日本をも政治的傘下に取り込み、その過程で前方後円墳を頂点とする前半期古代国家たる倭国へと変貌を遂げる。<sup>(60)</sup>

こうして、倭国の王権と政治的關係を取り結んだ首長の支配地域には、畿内大和を中心とする倭国の象徴であり、該体制下における首長の身分的位置付けをも示す前方後円墳を始めとする古墳が造営されたとされる。そして、こうした前方後円墳を頂点とする政治秩序に基づく古墳が造営された地域には、倭国の王権と密接に結びついた首長層が存在し、倭国領域を構成していたことになる。<sup>(61)</sup>



図版 3

また、三世紀後半の東北南半城などには、北陸系の土器とともに東海的な様相をもつ土器、前方後方形の墳墓などが、直接には北陸・関東地方などと密接なつながりを持ちながら展開したとみられ、同様の土器は東北南半城にとどまらず、山形盆地や大崎平野などの北半南辺にまで及んだとされる。また、東北南半城における前期古墳は三世紀後葉〜四世紀初頭にさかのぼり、その後、日本海側では新潟平野や山形盆地にまで、太平洋側では仙台・大崎平野にまで展開し、その総数も五〇基前後を数

えるとされる。すると、倭国を構成する勢力は、前期古墳文化の展開が雄弁に物語るように、三世紀後葉を通じて東北南半城、並びに北半南辺にも成立したと理解される。

以上をふまえると、前方後円墳体制を生み出す倭国社会の体系は、三世紀後半には会津盆地を始めとする南半南城、さらには仙台平野や米沢盆地、新潟平野などの南半北城、山形盆地や大崎平野などの北半南辺にまで及んで在地集団に受容され、やがて該地域に古墳を造営する社会を成立させたと考えられる。すると、倭国の領域は、既に古墳時代前期の段階で、古墳が造営されている東北南半城、及び大崎平野など北半南辺の一部にまで拡大したことになる。

しかも、東北北半南辺以南の東日本各地には、古墳時代を通じて古墳がほぼ継続的に造営されており、該地域には、古墳時代前期以降、倭国を構成する首長層が存在し続けたと解される。一方で、大崎平野と山形盆地、新潟平野の北には、一時的に進出した倭国勢力による北上川中流域の角塚古墳以外に古墳が造営されることは終になかった。すると、東北北半南辺以南とは異なり、古墳が造営されていない該地域の北には、倭国首長層は形成されなかったことになる。こうした東北地方南北の差異は、弥生時代を通じて東北南半以南が農耕社会を成立させたのに対し、縄文文化の生業伝統を継承した東北北半以北には、古墳文化を将来する基盤が未確立だったことに起因すると理解される。

以上をふまえると、東日本の倭国領域は、古墳時代前期には東北南半以南、並びに北半南辺の一部に及ぶ一方で、東北北半以北は、南辺の一部を除いて倭国領域外であったといえる。こうした弥生〜古墳時代を



画期として生じた文化・社会構造上の差異は、概ね東北南半以南の倭人社会と東北北半域から道南西部にわたった「えみし」社会との分化に拍車をかけ、その差異を一層顕在化させることになったと考える。

こうした東北地方南北の差はまた、人間集団の形質面にも懸隔を生じさせたと考える。即ち、岩手県大迫町アバクチ洞穴遺跡出土の弥生系（倭人系）幼児人骨の存在は注目すべきものではあるが、東北北半域在地集団の主体は、西日本弥生文化との格差、並びに四世紀前半頃に北海道後北文化との関係を深めていることなどをふまえると、倭人集団の移住や通婚などによる形質上の影響は、東北南半以南と比較すれば、さほど大きくはなかったと想像される。これに対して、東北南半域や関東地方の古墳時代人骨の大半は、九州北部などの渡来系弥生人骨と区別し得ないとされる。それは、東北南半域などの集団が、弥生古墳時代を通じて生活・文化面で倭人社会との本質的差異をなくしていたことを背景に、相互の交易・通婚関係などが一層促進されることで、形質的にも倭人とみなし得るものとなった結果と考えられる。

#### 四 後北・北大系文化要素の展開と「えみし」社会の紐帯

「C<sub>2</sub>・D式」に後続する北大式土器の本州側への展開は、「I式」がほぼ宮城・山形両県域を南限とする東北北半域に縮小する。また、「C<sub>2</sub>・D式」が確認された東北地方における遺跡数は、一九九八年の時点で、実に九三方所にのぼるのに対して、「I式」が確認された遺跡は、その五分の一程度にとどまるとされる。本州側では、後続の「II式」は確認

されておらず、「III式」も岩手県滝沢村高柳遺跡などで僅かに出土しているに過ぎない状況となることから、北海道方面との関係が弱まったとする指摘もみられる。

しかし、東北北半域の後北・北大式土器が出土する遺跡においては、東を中心とする頭位、土壙東壁側への袋状掘込みなど、千歳市ウサクマイ遺跡などでの事例にみるような北海道後北・北大系文化に特徴的な土壙墓、並びにそれとも密接に結びついている黒曜石製ラウンドスクレーパー、及びその剥片の副葬や散布など、北海道系要素が重層的に出現する傾向がみてとれる。そして、東北北半域における黒曜石製石器の製作と使用は、岩手県水沢市半入・雫石町仁沢瀬II、秋田県横手市田久保下、青森県中間林村森ヶ沢、八戸市田向冷水諸遺跡における事例、宮城県宮崎町湯ノ倉産黒曜石の交易と流通についての研究などから、在地土器の「南小泉式」→「引田式」→「住社式」などに伴う五〜六世紀代を主体とするものであったと理解される。

以上のように、「黒曜石」が利器であるとともに、葬送などの精神文化ともわかち難く結びついていることをふまえると、六世紀を中心とする「II式」期においても、東北北半域は北海道側と相通じる文化、ある種の価値観を共有していたといえるであろう。

七〜八世紀においても、東北北半域には片口土器、口縁部などに鋸齒や格子状の沈線、頸部などに段をもつ土器が出現するなど、「III式」期を含む擦文文化前期を中心とする北海道の土器群に共通する要素がみとめられる。これらのうち、およそ北緯三九度以北の東北北半域にみられる口縁部に横走する沈線をめぐらす土器器について、道南西部を中心

とする北海道擦文文化前期の土器群と一連のものともみなす理解も提起されている。<sup>(98)</sup>また、鋸歯や格子状の沈線をもつ土師器は、青森県南東部や岩手県域、宮城県北部などの馬淵川・北上川流域を中心に、三条以上の横走する多重沈線は、青森県津軽・下北地方や秋田県北部を中心とする日本海側に偏在するものの、一・二条の横走沈線については、東北北半域に普遍的にみとめられるとされる。<sup>(99)</sup>

既述したように、七・八世紀の東北北半から道南西部にわたった在地集団の主体は「えみし」であり、国史上のエミシ関連記事が七世紀頃から実録的になり始め、斉明紀を画期として天武・持統紀以降には、おしなべて実録的なものとなる。<sup>(100)</sup>これは、元来、倭国に抵抗する仇敵を意味した上代国語起源のエミシが、「えみし」に限定されることと密接に関わっていた。<sup>(101)</sup>すると、七・八世紀を中心とする時期、東北北半域から道南西部にわたった一連の沈線文土器などを共有した在地集団の主体もまた、国史上の「えみし」に一致することになる。

さらに、東北北半域には、七・八世紀を中心として、一部が九世紀以降る頃に概ね一〇m未満の墳丘をもつ群集墳が造営され、<sup>(102)</sup>構造や副葬品の性格などから「えみし」家父長層を葬ったとみられる。こうした群集墳の主体部は多くが土壙で、同様の群集墳は、同時期の石狩低地帯にも出現する。その構造などには、東北北半域の群集墳と一連の共通性のみとめられ、<sup>(103)</sup>鉄製農具を始めとする副葬品は、それが在地集団によって主体的に造営され、擦文文化の成立を象徴するものとされる。<sup>(104)</sup>また、北海道擦文文化の成立には、土師器や竈を有する方形の住居を始めとする東北北半域の生活様式や文化が深く関与したとされる。<sup>(105)</sup>

以上をふまえると、石狩低地帯に出現した群集墳被葬者もまた在地集団、即ち「えみし」家父長層であり、<sup>(106)</sup>道南西部にあって、七・八世紀に成立する擦文文化を担った集団もまた、「えみし」だったことが明確となる。国史上の「渡島蝦夷」などとみえるものは、道南西部や津軽半島域の「えみし」をさすものであったと考えられる。<sup>(107)</sup>

一方、七世紀代の北海道余市町大川遺跡などの積丹半島周辺では、錫製の腕輪や耳飾とみられる環状装身具が出土し、八・九世紀には、石狩低地帯などの墳墓群への副葬が多くみられ、東北北半域の群集墳などからも発見されているのに対し、<sup>(108)</sup>該期の関東地方以南には錫製品がみられなくなる。こうしたことから、錫製装身具は、積丹半島対岸の沿海地方の鉱石が擦文社会に将来、加工されたもので、その分布が擦文土器（既述した七・八世紀の東北北半域から道南西部に展開した沈線を有する土器群―筆者補註）の分布状況と一致するとして、東北北半域への搬入には擦文文化の人々が深く関与したとされる。<sup>(109)</sup>こうした錫製装身具が東北北半域にもたらされる中、倭国・日本側には及んでいないことは、道南西部前期擦文文化の「えみし」社会は、錫製装身具を自ら用いるとともに、東北北半「えみし」社会の需要に应运えてこれを供給したと考えられる。それが装身具であり、副葬品ともされたことをふまえると、「錫」もまた、津軽海峡をはさむ「えみし」社会のアイデンティティーを構成する精神文化の一つだったと解される。

また、東北北半域、並びに石狩低地帯の群集墳を始めとする墳墓の副葬品として知られる蕨手刀は、上信地方で成立して東北北半域において発達したとされ、<sup>(110)</sup>その他の刀剣類や農具などの鉄製品、ガラス玉を始め

とする玉類は、概ね倭国・日本側産品とみられる。これらの中には、国史にも散見されるように、渡島「えみし」の朝貢に際して、倭国・日本側が直接に下賜、或いは交易したのもあつたはずである。その一方で、既述した錫製装身具が、東北北半「えみし」社会へも供給されていることなどをふまえると、東北北半「えみし」社会は、そうした物資への対価として倭国・日本産品を仲介して道南西部「えみし」社会へもたらすこともあつたと考えるのが自然である。

九世紀代以降の事例とみられるが、延喜五年（九〇五）成立の『延喜式』民部下には、「交易雑物」として陸奥国の葦鹿皮・独犴皮・昆布、出羽国の熊皮・葦鹿皮・独犴皮などが見える。陸奥の昆布は、道南函館港周辺が後世に宇賀昆布として名高いものの、渡島「えみし」を管轄する出羽国に見えていないから、陸奥国土産と考えられる。<sup>11)</sup> 霊龜元年（七一五）に、岩手県閉伊地方の「えみし」とみられる須賀君古麻比留らが先祖以来昆布を献上してきたことを述べ、閉村に郡家を建てることを願つて許された記事『統日本紀』同年一〇月二九日<sup>12)</sup>が想起される。

また、弘仁元年（八二〇）には、大同二年（八〇七）八月一九日の彈正台例によつて腰帯に用いることを禁断されていた「独犴射葦鹿獾皮」が、その禁を解かれている『日本後紀』同年九月二八日。『延喜式』との対応関係をふまえると、「独犴射」は正しく「独犴」に解すべきである。同様に、『延喜式』出羽交易雑物の「熊」皮も、渡島「えみし」との関連も考えあわせると、「熊」（ヒグマ）皮だった可能性が高い。葦鹿（アシカ）・ヒグマ皮については、北海道から将来されたと考えられるが、当時の日本側が、そうした物資を交易し得たのは渡島「えみ

し」を描いては考え難い。アシカ皮が陸奥国の交易雑物でもあることを考えると、陸奥国側はそれを恒常的に入手できたことになるが、渡島「えみし」は出羽国管轄である。アシカ皮は、出羽「えみし」にとつて国衙などとの重要な交易物資だったはずであり、陸奥「えみし」が出羽「えみし」から、その多くを得たとは考えにくい。すると、陸奥国交易雑物としてのアシカ皮は、陸奥「えみし」が渡島「えみし」と直接交易して入手したと考えるのが最も自然であり、陸奥「えみし」側による対価は、鉄製品を始めとする日本産品であつたと考える。<sup>13)</sup>

一方、独犴については、『和名類聚抄』のうち、広く流布した伝本である那波道圓校訂活字本<sup>14)</sup>「毛群類第二百三十三」には、「胡地野犬名」の註記が見えるものの、『和名類聚抄』の古式を残すとされる名古屋市博物館所蔵本の該当部分には註記は一切なされていないばかりか、独犴だけは和訓が見えず、<sup>15)</sup> 早くに読みが忘れられたものと察せられる。このことから、流布本の註記は、かなり後世になされた可能性があつて信をおき難い。独犴は、和訓が早くに忘れ去られていることをふまえると、北海道よりもさらに遠方の地からもたらされたと思量される。

『和名類聚抄』の「独犴」は、海獣である葦鹿と水豹（アザラシ）の間に表記されている。日本近海の家獣類の中で、皮が珍重されるラッコは、元来アイヌ語に由来し、室町時代中期の『節用集』（文明本）には「獺 虎 ラッコ」が見え、<sup>16)</sup> 獺・海獺などに国語表記されてきた。独犴をラッコの音写とするには無理があるが、小型の家獣で、海を泳ぐ様が犬にたとえられなくもない。独犴はラッコに比定し得まいか。<sup>17)</sup>

こうした交易が九世紀には行われていたことは明らかであり、それが

八世紀、さらには七世紀にまでさかのぼる可能性がある。群集墳出土の副葬品にみる対価相応を考えるならば、七く九世紀には、東北北半域からは鉄製品や玉類を始めとする倭国・日本産品が、道南西部からは錫製装身具やアシカ・ヒグマ・ラッコなどの毛皮類が、相互に交易されたと考えられる。そこにはまた、東北北半域から道南西部にわたった「えみし」社会の紐帯をみてとることができる。

その後、九世紀代には、東北北半域の土器様相が東北南半以南と同様に律令的なものとなるのに対して、北海道側では独自性の強い擦文土器が成立するとして、津軽海峡をはさむ南北の分断が指摘されている。こうした「分断」とみえる現象は、九世紀初めの所謂三八年戦争終結の結果、東北北半以南の「えみし」社会が律令社会に吸収されていく過程で生じたもので、一〇世紀以降の王朝期には、「えみし」社会は、和人・公民化することで成立する俘囚社会と日本領域外の「えぞ」社会とに分化していったと理解される。<sup>(123)</sup>

それでも、元慶二年（八七八）、並びに天慶二年（九三九）に出羽秋田城下などを中心として広域をも巻き込んだ「えみし」蜂起に際して、日本側は、北方の津軽や渡島「えみし」の呼応に対する強い懸念を示している。<sup>(125)</sup> また、元慶時には、蜂起がほぼ終息した翌年早々、渡島「夷首」一〇三人が「種類」三〇〇〇人を率いて秋田城下に至り、津軽や蜂起に加わらなかつた「えみし」などとともに関應に与っている『日本三代実録』元慶三年正月一日。既述したように、九世紀代には、陸奥・出羽両国の「えみし」と渡島「えみし」との間には、日本産品と毛皮を始めとする北方産品との交易があつたと考えられる。すると、津軽

海峡をはさむ南北の「えみし」社会は、九世紀く一〇世紀前半においても、なお一連のまとまりをなすものとして理解し得ることになる。

## 五 「えみし」社会の成立と倭国（むすびにかえて）

既述したように、四世紀前半を中心とする時期、東北北半域広範に展開した「C・D式」とそれに伴う文化要素は、単独ではなく重層的に出現する傾向を示し、その中には葬送など精神文化にねざすものも含まれている。その後も、東北北半域と北大式、及びその系統に連なる道南西部擦文文化圏とは、葬送、「黒曜石」「錫」、土器の沈線、群集墳、交易などにみるように、古代を通じてほぼ継続的に相通じる文化や価値観を共有し、その紐帯を保持し続けている。東北北半域と道南西部との関係が弱まったかにみえる五世紀以降は、東北北半域の土師器が南半域とは様相を異にして独自性を強める時期にあたり、<sup>(126)</sup> そのことが北海道系土器そのものが稀薄となることも密接に関わっていたと解される。<sup>(127)</sup> やはり、東北北半域と南西部を中心とする北海道とは、概ね古代を通じて一連の社会を構成してきたと理解される。

こうした東北北半域から道南西部にわたる地域には、古代史上の「えみし」が居住していたから、津軽海峡をはさむ該地域に住み、相通じる文化、価値観を共有した在地集団の主体が「えみし」だったことは明らかである。東北北半域と南西部を中心とする北海道とが共通の文化要素や価値観を共有するようなあり方は、既述した縄文時代早期く弥生時代中期における「共通文化圏」に通じるものがある。東北北半、就中、そ

の北域山間などには、アイヌ語に由来するとみられる地名がまとまりをなす形でみとめられ、同じく山間の狩猟集団マタギの山言葉にもアイヌ語に共通する語彙が存在している。<sup>109</sup> こうした東北北半域を中心とするアイヌ語的要素から、「共通文化圏」や「拡大文化圏」成立の背景には、相互に通じ合うアイヌ語系言語の共有があったと理解される。<sup>110</sup>

以上をふまえると、古代「えみし」は、「拡大文化圏」南半を構成した集団として位置付けられ、「えみし」社会は、東北北半域が「拡大文化圏」に再編される（即ち、「C<sub>2</sub>・D式」が東北北半域広範に及ぶ）「赤穴式」後半の特殊撚糸文期と「塩釜式」前半期とが併行する四世紀前半を中心とする時期には、実体として成立したと理解される。<sup>112</sup>

別稿<sup>113</sup>でも論じたように、東北北半域から道南西部にわたった「えみし」社会成立に至る過程は、主として倭人弥生社会、並びにそれを政治的に統合した倭国古墳社会の動きと密接に連動していたと解される。即ち、一世紀第2四半期頃の畿内第V様式の成立は、弥生後期倭人社会の激動の中で生じたものとみられ、その影響は、東北地方全域を「天王山式」土器群に伴う文化に斉一化させたものと理解される。また、既述した二世紀後半とみられる倭人社会の争乱は、二世紀第2四半期頃には成立していたとみられる「C<sub>1</sub>式」による全道的展開を惹起したと考える。さらに、三世紀半ば過ぎには、邪馬台国連合が東海・北陸・関東・甲信地方など東日本をも傘下におさめて倭国へと変貌を遂げると、三世紀後半く四世紀初頭には、直接には北陸・関東勢力の影響下で東北南半域や北半南辺の一部に倭国を構成する首長層が形成されたと解される。

そして、四世紀初頭までには、福島県傾城壇古墳などの畿内に起源す

る定型化以前の前方後円墳と、山形県蒲生田山三・四号墳などの東海西部に起源するとみられる前方後方墳とが併行する形で造営されたとみられる。<sup>114</sup> 前方後円墳と前方後方墳とが併行して造営される事例は、東日本各地でみとめられるが、同様の状況が東北南半域においても生じているのは、北陸・関東勢力が該地域の古墳社会形成に関与した証左として理解される。<sup>115</sup> こうして生じた緊張は、旧「共通文化圏」域を構成した東北北半域、並びに道南西部を介して全道に及び、旧「共通文化圏」域は、全道を斉一化した「C<sub>2</sub>・D式」の広範な展開が意味するように、「拡大文化圏」南半へと再編されたと理解される。

こうした倭人社会の政治的統合に起因する激動、並びに倭国勢力北進の脅威は、東北北半域のみならず、一時は南部樺太・南部千島をも「拡大文化圏」に編入する形で、後世のアイヌ文化を産み出す胎動を惹起したと解される。その一方で、四世紀前半を中心とする時期には、旧「共通文化圏」の伝統を継承する東北北半域から道南西部にわたる地域に「拡大文化圏」南半の地域性ともいい得る「えみし」社会を成立させたのであった。してみると、「えみし」社会が古代を通じて倭国・日本と対峙する状況は、「えみし」社会の成立過程が既に暗示するように、当初から宿命付けられていたといえはいい過ぎであろうか。

#### 謝辞

小口雅史先生には、拙稿の不備から、大変お手数をおかけするとともに、貴重なご教示をいただきました。また、日頃より賜っているご指導ともあわせて深く御礼申し上げます。

註

(1) 本小論は、新潟県を含む東北地方について、およそ盛岡市と秋田市とを東西に結ぶ線以北を北半北域に、その南から大崎平野と山形盆地を含む宮城・山形両県北部、並びに新潟県平野の北を北半南域、その南の仙台平野と米沢盆地を含む宮城・山形両県南部、及び新潟平野までを南半北域、その南の宮城県南辺、福島県、新潟県南部を南半南域に規定する。なお、青森県津軽平野以北や下北地方などを東北北辺、大崎平野・山形盆地などを北半南辺などにも表記する。

(2) 女鹿潤哉『『えみし』と『えぞ』についての一考察』『北奥古代文化』第二六号(一九九七年、以下女鹿一九九七年bと称す)、並びに女鹿「用字変遷より見たる古代『えみし』についての一考察」『弘前大学國史研究』第一〇四号(一九九八年、以下女鹿一九九八年aと称す)他。

(3) 小論は、前方後円墳成立以後の倭人社会について、前方後円墳を頂点とする政治秩序に基づく国家段階であり、古代国家前半期に位置付け得るとする理解「都出比呂志」「日本古代の国家形成論序説 前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』第三四三三号(一九九一年)に従うとともに、名を単位とする課税形態に基づく国衙・荘園体制が中世社会の基盤となっていることを評価し、概ね一〇世紀以降の王朝期を中世初期に位置付ける。以下、古墳時代を古代前半期に位置付けて論を展開する。

(4) 中国史書は、弥生古墳時代の我が国を倭、倭国に作り、日本史上の弥生時代と古墳時代との差異をみとめていない。これは、古墳時代の倭国は、畿内大和を中心とする勢力が弥生時代に形成されていた倭人社会を政治的に統合したものとする中国側認識を反映するものと理解される。

一方、日本国号は、天皇号とともに、律令国家日本の成立と密接に結びつくもので「鎌田元一」「大王の出現」『日本の古代 第六巻 王権をめぐる戦い』(中央公論社、一九八六年)、天武・持統朝における飛鳥

浄御原令編纂・施行と密接に関連するとされる「東野治之」「付録 天皇号の成立年代について」『正倉院文書と木簡の研究』(塙書房、一九七八年)。中国側が唐代以降に用いる日本国号は、天皇制に基づく律令国家の確立を前提としたものと解される。こうした理解に基づき、天武・持統朝の前後で倭国と日本(律令国家などにも表記する)とを使い分け

(5) 女鹿「仁徳紀『田道』伝承と角塚古墳」『弘前大学國史研究』第一〇七号(一九九九年、以下女鹿一九九九年bと称す)、並びに女鹿「古墳時代における『えみし』の位置付けについて」『弘前大学國史研究』第一一〇号(二〇〇一年、以下女鹿二〇〇一年aと称す)、女鹿「東北北半域における弥生時代終末期と古墳時代前期」『岩手考古学』第一三三号(二〇〇一年、以下女鹿二〇〇一年bと称す)。

(6) 女鹿『『えみし』成立過程についての研究—『『えみし』』『えぞ』とその系統—展示に向けての一視点—』『岩手県立博物館研究報告』第一九号(二〇〇二年、以下女鹿二〇〇二年aと称す)、並びに女鹿「後北C・D式土器の東北北半への展開と『えみし』社会の成立」『北海道考古学』第三八輯(二〇〇二年、以下女鹿二〇〇二年bと称す)。

(7) 註(5)、並びに註(6)前掲。

(8) 佐藤信行「考古学編」『宮城の研究』第一巻(清文堂出版、一九八四年)に拠った。また、木村高も、青森県域では後北A、B式併行の関連資料も僅かながら確認されるとしている。「青森県域における続縄文文化」『岩手考古学会第二九回研究大会資料』並びに発表要旨(二〇〇二年)。

(9) 新潟県教育委員会『内越遺跡』「新潟県埋蔵文化財調査報告書第三三」(一九八三年)。

(10) 東北北半域における弥生時代後期の土器編年については諸説あるが、

小論は、所謂天王山式土器を特徴付けるとされる交互刺突文などを中心とする施文の変化を時間差とみなし、その後特殊捺糸文段階を位置付け、天王山式段階（交互刺突様浮線文段階→交互刺突文段階）→赤穴式相当段階（退化交互刺突文段階→特殊捺糸文段階）とする理解（斎藤邦雄「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』第五号（一九九三年））に拠った。

(11) 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書』XXX〔K一三五遺跡四丁目地点、五丁目地点〕（一九八七年）。

(12) 上野秀一「北海道における天王山式土器について―札幌市K一三五遺跡四丁目地点出土資料を中心に―」『東北文化論のための先史学・歴史学論集』（加藤稔先生還暦記念会、一九九二年）。

(13) 註(5) 女鹿二〇〇一年b、並びに註(6) 前掲。

(14) 大沼忠春「後北式土器」『縄文土器大成』（講談社、一九八二年）は、後北C<sup>2</sup>・D式について、C<sup>2</sup>式初→一般的なC<sup>2</sup>・D式→C<sup>2</sup>・D式後葉→C<sup>2</sup>・D式末の四段階に分類している。

(15) 秋田県埋蔵文化財センター「寒川Ⅱ遺跡」『秋田県埋蔵文化財調査報告書』〔以下、『秋田埋文報告書』とだけ表記する〕第一六七集〔寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡〕（一九八八年）。

(16) 註(10) 斎藤前掲。

(17) 木村高「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係―続縄文土器との共伴事例から―」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第四号（一九九九年）。

(18) (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、岩手埋文と称す）『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』（以下、『岩手埋文報告書』とだけ表記する）第二二五集〔大日向Ⅱ遺跡〕（一九九四年）。

(19) 岩手埋文金子昭彦氏の「教示、並びに『岩手埋文報告書』第三八八集（二〇〇二年）による。同氏は、「C<sup>2</sup>・D式」口縁を模した甕が胴下部がほぼ無文であり、「C<sup>2</sup>・D式」の施文構成を省略したものとみなし、埋土上部の「C<sup>2</sup>・D式」片よりも先に埋納されたことは確実であると述べている。

(20) 高橋昭二・武田良夫「岩手県における後北式文化」『北奥古代文化』第一三号（一九八二年）。

(21) 盛岡市教育委員会『永福寺山遺跡発掘調査報告書』（一九九七年）。

(22) 後北C<sup>2</sup>・D式→北大式期には、方形に打ち割るなどした石が被葬者の頭部付近などに配される事例が知られている。方割石が該期の葬送伝統を構成する要素であることについては、擦文文化初期を中心とする墓壙群が確認された千歳市ウサクマイ遺跡などで、既に指摘されていた（「菊池徹夫『烏榑舞』」（ウサクマイ遺跡研究会編、雄山閣、一九七五年））。

(23) 青森県埋蔵文化財調査センター「青森県埋蔵文化財調査報告書」第二六〇集〔隠川（一）遺跡Ⅰ・隠川（二）遺跡Ⅱ〕（一九九九年）。

(24) 註(17)、並びに註(23) 前掲。

(25) 井上雅孝「大石渡V遺跡」『岩手考古学会第一六回研究大会資料』（一九九六年）。

(26) 芳賀英美「石巻市新金沼遺跡」『平成九年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』（一九九七年）。

(27) 多賀城市教育委員会「多賀城市文化財調査報告書」第二集〔山王・高崎遺跡発掘調査概報〕（一九八一年）、並びに高倉敏明「山王遺跡」『多賀城市史』第四巻考古資料（一九九一年）。

(28) 築館町教育委員会『築館町文化財調査報告書』第五集〔伊治城―平成三年度発掘調査報告書〕（一九九二年）。

(29) 木村高「東北地方―後北C<sup>2</sup>・D式土器、北大I式土器の周辺―」『北海道考古学』第三〇輯（一九九四年）、並びに註（17）前掲。

(30) 弥生時代終末期と古墳時代前期との併行については、既に註（29）木村一九九四年、註（21）前掲が指摘し、註（5）女鹿二〇〇一年b、並びに註（6）前掲でも検証している。

(31) 佐藤信行「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』（東出版寧楽社、一九七六年）、註（8）佐藤一九八四年前掲、加藤道男「東北地方の古墳時代の土器」『日本土器事典』（雄山閣出版、一九九六年）、並びに右代啓視「オホーツク文化にかかわる編年の対比」『北の歴史・文化交流研究事業研究報告』（北海道開拓記念館、一九九六年）。

(32) 北海道大学『北大構内の遺跡』五（一九八七年）。

(33) 国立歴史民俗博物館『蝦夷の墓―森ヶ沢遺跡調査概要』（一九九四年）。

(34) 八戸遺跡調査会『八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書』第一集「田向冷水遺跡発掘調査報告書」（二〇〇一年）。なお、田向冷水遺跡では、五世紀末〜六世紀初頭の土師器に客体的に伴うとされているが、他の事例をふまえると、北大I式が五世紀末を大きく降るとは解し難い。

(35) 西目町教育委員会他『秋田県由利郡西目町宮崎遺跡発掘調査報告書』（一九八七年）。

(36) 松田亜紀子「山田遺跡出土の続縄文土器について」『山形県地域史研究』二二（一九九八年）。

(37) 註（5）女鹿二〇〇一年b、並びに註（6）前掲。ただし、千歳市祝梅山田遺跡での事例を引いて、「I式」が「C<sup>2</sup>・D式末」に併存し、「塩釜式」期後半にまでさかのぼる根拠とみなす見解もある（註（29）木村一九九四年前掲）。

(38) 日下和寿「考察」『九戸郡山形村丹内I遺跡発掘調査報告書』（岩手県

立博物館、一九九七年）などに示唆を得た。

(39) 小山田宏一「近畿地方暦年代の再整理」『考古学と実年代』〔第四〇回埋蔵文化財研究会発表要旨集〕（埋蔵文化財研究会、一九九六年）。

(40) 註（6）前掲。

(41) 註（6）前掲。

(42) 註（31）佐藤一九七六年前掲。

(43) 高橋信雄「蝦夷文化の諸相」『古代蝦夷の世界と交流』（名著出版、一九九六年）。

(44) 時代は降るが、五世紀第3四半期造営とされる岩手県南部の胆沢町角塚古墳の造営には、その南東に位置する水沢市半入遺跡にあった集団が深く関与した可能性がある（高木晃「半入遺跡」『平成一一年度埋蔵文化財公開講座遺跡報告会』、並びに発表要旨（岩手埋文、一九九九年）、高木「半入遺跡」『岩手考古学会第二四回研究大会資料』、並びに発表要旨（二〇〇〇年）、『岩手埋文報告書』第三八〇集（二〇〇二年））。

筆者は、仁徳紀上毛野君田道伝承などに示唆を得て、半入遺跡の成立、並びに角塚古墳造営には、大崎平野ないしは仙台平野に進出していった群馬県域を拠点とする上毛野氏族へと連なる支族が関与した可能性を指摘した（註（5）女鹿一九九九年b、同じく女鹿二〇〇一年a前掲、並びに女鹿「五世紀後半の倭国エミシ認識と在地集団『えみし』」『岩手考古学』第二二号（二〇〇〇年））。なお、吉谷昭彦・高橋誠明「宮城県における続縄文系石器の意義と石材の原産地同定」『宮城考古学』第三号（二〇〇一年）も、五世紀を中心とする大崎平野地域には、上毛野氏を上級首長とする勢力が存在したことを想定している。

(45) 註（44）女鹿二〇〇〇年、並びに註（5）女鹿二〇〇一年a・b前掲。

(46) 註（5）女鹿二〇〇一年b、並びに註（6）女鹿二〇〇二年a前掲。



- (47) 北大式土器の暦年代については、「Ⅱ式」を六世紀代、「Ⅲ式」を七世紀代に位置付ける理解〔註(31) 右代一九九五年前掲〕に従った。また、「Ⅲ式」を擦文土器の初期型式とみなす〔横山英介「擦文時代の開始年代修正について」『考古学ジャーナル』No. 二九二(ニュー・サイエンス社、一九八八年)〕、或いは「Ⅲ式」とされている土器群を含む十勝茂奇式を設定して擦文初期に位置付ける理解〔大沼忠春「北海道の文化」『古代史復元 九 古代の都と村』(講談社、一九八九年)〕に拠った。
- (48) 一二〜一三世紀には、北海道擦文文化が終焉を迎え〔註(47) 大沼一九八七年、並びに註(31) 右代一九九五年前掲他〕、アイヌ文化へと変貌を遂げたとする理解は、今日では大方の支持を得ており〔財〕アイヌ文化振興・研究推進機構『よみがえる北の中・近世 掘り出されたアイヌ文化』(同名展示会図録、二〇〇一年)、並びに展示内容に拠った〕、筆者もそれに与するものである〔註(2) 女鹿一九九七年b前掲他〕。
- また、古代「えみし」の系統のうち、東北北辺以北にあつて、中世「えぞ」の一部を構成した集団は、系統的にアイヌへと連なつており、アイヌ居住域が東北北辺に縮小するのは、「えみし」から「えぞ」へと連なる系統が、アイヌ文化成立以前の律令王朝期を通じて、北辺部を除き、和人地内に隔絶されて和人化した結果であると理解する〔註(2) 女鹿一九九七年b前掲、並びに女鹿『えみし』『えぞ』の系統とアイヌ』『岩手考古学』第一号(一九九九年、以下女鹿一九九九年aと称す)。
- (49) 註(2) 女鹿一九九七年b、同じく女鹿一九九八年a前掲。
- (50) 樺太・千島については、後北C<sup>2</sup>・D式期以降、「拡大文化圏」を象徴する北大式土器群は展開しておらず、擦文文化の遺跡も存在しないとされる〔菊池俊彦「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」『北方文化研究』第二二号(一九七八年)〕が、後期の擦文土器は、南部樺太

や国後島に及んでいる〔中田裕香「北海道の古代社会の展開と交流」『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、一九九六年)。

- また、『元史』や『経世大典』序録〔『元分類』所収〕をふまえると、アイヌ文化の成立とアイヌの樺太進出は、遅くとも一三世紀を降るものではありえない〔菊池前掲〕。既述したように、アイヌ文化の成立を一二〜一三世紀とみなすと、該期には、近世におけるアイヌ文化圏の原型が確立されていたと解され、千島でも、資料には乏しいものの、樺太と同様の状況を想定する〔女鹿「ウファイ考―樺太アイヌの Mummification についての一考察―」『北海道考古学』第三二輯(一九九六年)、並びに榎森進「アイヌ民族の去就(北奥からカラフトまで)―周辺民族との「交易」の視点から―」『北から見直す日本史 上之国勝山館跡と夷王山墳墓群からみえるもの』(大和書房、二〇〇一年)〕のが自然である。
- (51) 富樫泰時「円筒土器分布圏が意味するもの」『北奥古代文化』第六号(一九七四年)、並びに富樫「円筒土器様式と大木土器様式」『北からの視点』日本考古学協会一九九一年度宮城・仙台大会実行委員会(一九九一年)などに示唆を得た。女鹿「北部東北地方弥生時代のクマ意匠が意味するもの」『岩手県立博物館研究報告』第一六号(一九九八年)、女鹿『クマ祭儀』の行方 縄文時代後期〜弥生時代中期の北部東北地方と北海道における『クマ意匠』をめぐる一考察〔『北海道考古学』第三二輯(二〇〇〇年)、並びに註(6) 女鹿二〇〇二年a前掲参照〕。
- (52) 註(2) 女鹿一九九七年b、並びに註(48) 女鹿一九九九年a前掲。
- (53) 註(48) 女鹿一九九九年a、並びに註(6) 女鹿二〇〇二年a前掲。
- (54) 石原道博「魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」(和田清・石原編訳、岩波書店、一九五一年)。
- (55) 註(54) 前掲。
- (56) 国立歴史民俗博物館『邪馬台国時代の東日本』(一九九一年) 他によ

る。

- (57) 白石太一郎「邪馬台国時代の畿内・東海・関東」『邪馬台国時代の東日本』〔註(56)前掲〕、並びに白石「一 古墳と邪馬台国」『古墳の語る古代史』〔歴史博ブックスレット⑥〕(財団法人歴史民俗博物館振興会、一九九八年)他。
- (58) 註(57)前掲。
- (59) 山尾幸久「邪馬台国と狗奴国の戦争―西日本の東端と東日本の西端―」『邪馬台国時代の東日本』〔註(56)前掲〕。
- (60) 三品彰英「邪馬台国の位置―その研究史的考察」『学芸』三七(一九四八年)、並びに三品「倭人伝研究の歩み」『邪馬台国研究総覧』(創元社、一九七〇年)。
- (61) 註(57)白石一九九一年前掲。
- (62) 註(5) 女鹿二〇〇一年 a・b、並びに註(6)前掲。
- (63) 弥生時代終末期〜古墳時代初頭、狗奴国の拠点とみられる東海西部に起源する土器、並びに前方後方形の周溝墓などは、関東・甲信地方などの東日本広域に展開しており、東日本には狗奴国連合ともいうべき緩やかな政治的まとまりが存在していたとされる〔註(57)前掲〕。
- (64) 赤塚次郎「前方後方墳の定着―東海系文化の波及と葛藤―」『考古学研究』第四三巻第二号(一九九六年)、並びに比田井克仁「定型化古墳出現以前における濃尾、畿内と関東の確執」『考古学研究』第四四巻第二号(一九九七年)。
- (65) 甘粕健「基調報告 みちのくを指して 日本海ルートにおける東日本の古墳出現期にいたる政治過程の予察」『シンポジウム二 東日本における古墳出現過程の再検討』(日本考古学協会新潟大会実行委員会、一九九三年)、並びに甘粕「基調報告 東日本における古墳の出現」『東日本の古墳の出現』(山川出版社、一九九四年)。
- (66) 註(5) 女鹿二〇〇一年 a・b前掲。
- (67) 邪馬台国連合側は、狗奴国連合に対する楔として、前方後円墳の祖形となる嚮向型前方後円墳を関東地方の拠点に造営させ、三角縁神獣鏡を分賜したとする理解も提起されている〔註(64)比田井一九九七年前掲〕。その後、三世紀半ば過ぎには、関東地方の前方後方墳に畿内系の二重口縁壺が出現するなど、東海西部が畿内の傘下に入ったことが示唆され〔註(64)前掲〕、倭国の象徴たる前方後円墳の大規模なものが東日本各地に造営されたとみられる〔註(65)前掲に拠った〕。
- こうした状況は、畿内勢力、即ち邪馬台国連合側が狗奴国連合との戦いに勝利、または邪馬台国連合側の主導のもとに、既述した東日本における確執の状況が収束されたことを示すもので、西日本を中心とする邪馬台国連合は、東日本の狗奴国連合をも取り込んだことを物語っている〔註(57)、(64)前掲に拠った〕。
- (68) 註(3) 都出一九九一年前掲に拠って導き出された理解による〔註(5) 女鹿二〇〇一年 a・b前掲〕。
- (69) 都出比呂志「古墳が造られた時代」『古代史復元 六 古墳時代の王と民衆』(講談社、一九八九年)に拠った。小論にいう古墳は、前方後円墳を始めとする定型化した高塚を指し、後述する群集墳は含まない。
- (70) 註(69) 都出一九八九年、並びに註(3) 都出一九九一年前掲などに拠って導かれた理解〔註(5) 女鹿二〇〇一年 a・b前掲〕による。
- (71) 日本考古学協会新潟大会実行委員会『シンポジウム二 東日本における古墳出現過程の再検討』、並びに同記録集『東日本の古墳の出現』所収諸報告「ともに註(65)前掲」などに拠って導かれた理解〔註(5) 女鹿二〇〇一年 a・b前掲〕による。
- (72) 辻秀人「蝦夷と呼ばれた社会」『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、一九九六年)。

- (73) 寺澤薫「第七章 王権の誕生」『日本の歴史02 王権の誕生』（講談社、二〇〇一年）。
- (74) 甘粕健「古墳文化の形成」『新潟県史』通史編「一 原始・古代」（新潟県、一九八六年）。
- (75) 川崎利夫「東北」『古墳時代の研究』第一巻（雄山閣、一九九〇年）。
- (76) 藤沢敦「東北」『古墳時代の研究』第一巻〔註（75）前掲〕。
- (77) 辻秀人「古墳の変遷と画期」『新版古代の日本』第九巻 東北・北海道（角川書店、一九九二年）。
- (78) 註（65）、（72）前掲によって導き出された理解〔註（5）女鹿二〇〇一年 a・b〕による。
- (79) ただし、東北北半地域の在地集団の主体は「えみし」であり、北半南辺では、「えみし」と倭国勢力とが混在する状況にあつたと理解される〔註（5）女鹿二〇〇一年 a、並びに註（6）女鹿二〇〇二年 a 前掲〕。
- (80) 註（5）女鹿一九九九年 b、同じく女鹿二〇〇一年 a 前掲。
- (81) 大阪府弥生文化博物館『みちのく弥生文化』〔平成五年春季特別展図録〕（一九九三年）などによって示唆を得た理解〔註（5）女鹿二〇〇一年 a、並びに註（6）女鹿二〇〇二年 a 前掲他〕による。
- (82) 概要について、奈良貴史「アバクチ洞穴遺跡・岩手県大迫町」『発掘された日本列島九八 新発見考古速報展』（文化庁、一九九八年）参照。
- (83) 東北北半域において、古墳時代人骨の発見例は少ないが、宮城県石巻市五松山洞穴遺跡から出土した六世紀末〜七世紀前半の豪族層とみられる一九体の人骨のほとんどは関東地方の古墳時代人骨に近いが、成人頭骨二例には、アイヌとの類似もみとめられるという〔山口敏「石巻市文化財調査報告書」第三集（石巻市教育委員会、一九八八年）〕。また、山形県酒田市の離島飛島の洞穴出土人骨二〇体のうち、九世紀のものとさ

れる一体には、縄文人的な形質がみとめられるとされる〔石田肇「東北地方出土の古代人骨の形質について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』（加藤稔先生還暦記念会、一九九二年）〕。

縄文・アイヌの形質を残す人骨は少ないものの、景行紀の「蝦夷」は、実録的とはいえないが、「飛禽」「走獸」に擬せられ「四〇年七月一六日」〔そこには記紀編纂時の律令国家の「えみし」に対する認識が示されている〔註（2）女鹿一九九八年 a 前掲、並びに女鹿「毛人・蝦夷・蝦夷の意味と考古学」『岩手考古学』第一〇号（一九九八年、以下女鹿一九九八年 b と称す）〕。また、斉明紀は、倭国側が唐に派遣した使節が「道輿蝦夷」男女二人を同伴したことを記し「五年（六五九）七月三日」、同条所収「伊吉連博徳書」は、「えみし」を間見した唐の高宗が、その「身面の異」に驚いたと記している。

また、斉明五年以前の倭国公記録には、「えみし」を表記する用字として毛人が用いられたと考えられ〔註（2）女鹿一九九八年 a 前掲〕、中国の毛人は、古典上で東方に住むとされる毛民に基づくもので、多毛を意味するとされ〔児島恭子「エミシ、エゾ、『毛人』『蝦夷』の意味」『竹内理三先生喜寿記念論文集 上巻 律令制と古代社会』（竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編、東京堂出版、一九八四年）〕、事実、『山海経』「大荒北経」郭璞註や『淮南子』高誘註も毛民が多毛だとしている〔小口雅史「『蝦夷』表記論の新展開」『文化における北』〔昭和六二・六三年度特定研究報告書』（弘前大学人文学科、一九八九年）〕。そして、蝦夷や蝦夷の「蝦」は、蝦に同じくエビの意で多毛の表現とされ、唐代史書『唐書』の蝦夷、『通典』『唐会要』の蝦夷は「鬚長四尺」と記され、「伊吉連博徳書」の内容にも通じる〔佐伯有清「古代蝦夷史についての一考察」『北方文化研究』一七（一九八五年）〕。さらに時代は降るが、永観元年（宋の雍熙元年、九八三）に入宋した東大寺の僧裔然は、

宋の太宗に対して、唐代の蝦蟇・蝦夷に対応する「海島」の「夷人」について、筆談によって「身面皆に毛有り」と回答している『宋史』外国伝日本国。

以上をふまえ、中国及び倭国・日本側には、倭国・日本の所謂毛人や蝦蟇・蝦夷について、多毛だとする認識があったことは疑いなく、それらの用字が歴史的に「えみし」を表記してきたことをも考え合わせると、「えみし」と和人とは、形質的にも差異があったとする理解を提起した。〔註(6) 女鹿二〇〇二年 a 前掲〕。

(84) 山口敏「古人骨にみる北部日本人の形質」『北からの視点』(日本考古学協会一九九一年度宮城・仙台大会実行委員会、一九九一年)。

(85) 註(5) 女鹿一九九九年 b、並びに註(6) 女鹿二〇〇二年 a 前掲。

(86) 小野裕子「北海道における続縄文文化から擦文文化へ」『考古学ジャーナル』No.四三六(ニュー・サイエンス社、一九九八年)。

(87) 滝沢村教育委員会『岩手県滝沢村文化財調査報告書第七集』〔高柳遺跡〕(一九八七年)。

(88) 註(86) 前掲。

(89) 註(2) 女鹿一九九七年 b 前掲。

(90) 註(44) 高木一九九九年、二〇〇〇年、岩手埋文二〇〇二年前掲。

(91) 『岩手埋文報告書』第一八五集「仁沢瀬遺跡群」(一九九三年)。

(92) 「V 田久保下遺跡」『秋田埋文報告書』第二二〇集(一九九二年)。

(93) 註(33) 前掲。

(94) 註(34) 前掲。

(95) 註(44) 吉谷・高橋前掲。

(96) ただし、岩手県滝沢村大石渡・同仏沢Ⅲ遺跡における事例は「C<sub>2</sub>・D式」に伴うとされ「滝沢村教育委員会『岩手県滝沢村文化財調査報告書』第二四号「大石渡遺跡」(一九九三年)」、宮城県小牛田町山前遺跡

〔青山博樹「小牛田町山前遺跡出土の塩釜式土器とラウンドスクレーパー——北辺の古墳時代社会と続縄文文化——」宮城考古学』第一号(一九九九年)〕や同瀬峰町大境山遺跡「瀬峰町教育委員会『瀬峰町文化財調査報告書』第四集「大境山遺跡」(一九八三年)」、同色麻町色麻古墳群「宮城県文化財保護協会「色麻古墳群」宮城県宮園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和五十七年度)」「宮城県文化財調査報告書第九五集」(一九八三年)〕では「塩釜式」に伴い、寒川Ⅱ遺跡では、「C<sub>2</sub>・D式」が出土した土壙墓周辺から、黒曜石製石器が出土しており「註(15) 前掲」、黒曜石製石器の製作・使用は、東北北半域においても四世紀代にさかのぼる。

一方、既述した「Ⅲ式」が出土した高柳遺跡は、共存関係にはないものの、七世紀代の土師器を主体としており「註(87) 前掲」、岩手県山田町房の沢Ⅳ遺跡からは、八世紀前半とみられる土師器を伴う群集墳周湊から出土する『岩手埋文報告書』第二八七集「房の沢Ⅳ遺跡」(一九九八年)など、東北北半域においては、「黒曜石」と葬送との関わりが七〜八世紀代まで遺存している可能性がある。

(97) 高橋信雄「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器との対比」『北奥古代文化』第一三三号(一九八二年)。

(98) 註(97) 前掲、並びに光井文行「七・八世紀にみられる沈線文をもつ土器について」『財』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』VII(一九八七年)。

(99) 光井文行「岩手県にみられる古代の北海道系土器について」『財』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X(一九九〇年)。

(100) 三浦圭介「古代における東北地方北部の生業」『北からの視点』(日本考古学協会一九九一年度宮城・仙台大会実行委員会、一九九一年)、並びに大沼忠春「北海道の古代社会と文化」『古代蝦夷の世界と交流』

(名著出版、一九九六年)。

- (101) 宇部則保「特集蝦夷の考古学 古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『考古学ジャーナル』No.四六二(ニュー・サイエンス社、二〇〇〇年)。
- (102) 坂本太郎「日本書紀と蝦夷」『蝦夷』(古代史談話会編、朝倉書店、一九五六年)。
- (103) 註(2) 女鹿一九九八年a、並びに註(83) 女鹿一九九八年b前掲。
- (104) 沼山源喜治「陸奥北半における末期古墳群の性格」『北奥古代文化』第八号(一九七六年)。
- (105) 林謙作「『五条丸古墳群』の被葬者たち」『考古学研究』第二五卷第三号(一九七八年)。
- (106) 石附喜三男「北海道における八世紀前後の墳墓とその系統」『古代学』第二二巻第四号(一九六六年)。
- (107) 天野哲也「擦文文化成立における古墳の意義」『考古学研究』第二四巻第一号(一九七七年)。
- (108) 桜井清彦「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址―東北地方における集落址の研究―』(東京大学東洋文化研究所、一九五八年)。
- (109) 註(106) 前掲。
- (110) 渡島については、石狩低地帯以南の道南西部とする見解「河野廣道「阿部臣の『後方羊蹄』はどこか」『季刊 歴史家』No.四(一九五四年)」、ないしは道南西部とともに津軽半島域を含むとする理解「小口雅史「阿倍比羅夫北征地名考」『文経論叢』二七―一三(弘前大学人文学部、一九九二年)、並びに小口「渡嶋再考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第八四集「特定研究 古代における北方交流史の研究」(二〇〇〇年)」が妥当だと思われる。ただし、北海道の小地域名は、六国史上に散見されるものの、それが重出することはなく、ほぼ六国史を通じて見る渡島は、直接には津軽半島域から道南西部にわたる広域を指すもので、時には道北東部の擦文社会をも指す場合もあったと考える「註(2) 女鹿一九九八年a、並びに註(6) 女鹿二〇〇二年a前掲」。
- (111) 小嶋芳孝「蝦夷とユーラシア大陸の交流」『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、一九九六年)。
- (112) 註(111) 前掲。
- (113) 大場磐雄「蕨手刀に就いて」『考古学雑誌』第三四巻第一〇号(一九四七年)、並びに石井昌国「蕨手刀―日本刀の始源に関する考察―」(雄山閣、一九六六年)に拠った。
- (114) 陸奥国は、弘仁元年(八一〇)に気仙郡に漂着した渡島狄について、「当国の管る所にあらず」『日本後紀』同年一〇月二七日」としている「熊谷公男「阿倍比羅夫北征記事に関する基礎的考察」『東北古代史の研究』(吉川弘文館、一九八六年)に拠った」。
- (115) 平安時代末の源仲正(頼政の父) 詠に「わか恋はあしかをねらふえそ舟のよりみよらすみなみ間をそ待」『夫木和歌抄』所収」と見えることから、アシカは北海道所出とみなし得る。
- (116) 註(114) 前掲の渡島「えみし」の気仙郡漂着などは、こうしたことを背景としていたとも考えられる。
- (117) 正宗敦夫編『倭名類聚抄』(風間書房、一九七七年)に拠った。
- (118) 名古屋博物館『和名類聚抄』(名古屋博物館叢書二、一九九二年)に拠った。
- (119) 日本国語大辞典第二版編集委員会他「らっこ」『国語大辞典』第二版第一三巻(小学館、二〇〇二年)に拠った。
- (120) 独犴皮は、古代に渡島「えみし」を通じて日本との交易品となるも、その供給者が千島方面のオホーツク文化の形成者であったため、道北東

部のオホーツク文化の崩壊と擦文化によって一時供給が途絶え、一二一三世紀に該地域に進出してオホーツク文化の末裔を同化して成立する千島アイヌが、中世日本に南部千島・北海道を介してアイヌ語起源の「ラッコ」皮として再び将来したものと思量される。

(121) 註(100) 三浦一九九一年前掲。

(122) 三浦圭介『新編弘前市史』資料編考古編(新編弘前市史編纂委員会、一九九五年)他。

(123) 齊藤利男「蝦夷社会の交流と『エゾ』世界への変容」『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、一九九六年)。

(124) 註(123)、並びに註(2) 女鹿一九九七年b前掲。

(125) 前者については、『日本三代実録』元慶二年七月一〇日、並びに同九月五日に拠った。また、後者についても、「賊徒」が「異類」を率いて秋田郡に襲来したとされ『貞信公記抄』天慶二年五月六日、この「異類」を津軽・渡島の「えみし」と見なす見解「新野直吉『古代東北の兵乱』(吉川弘文館、一九八九年)」が示されている。両者の類似性を考えると、ともに秋田城下の俘囚、津軽、渡島など広域の「えみし」社会の交易を中心とした利害が背景にあったと考えられる。

(126) 東北地方の南北における土師器の差異については、宮城県文化財保護協会「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』VI「宮城県文化財調査報告書第八三集」(一九八二年)を始めとして多くの指摘がみられる。

(127) 註(44) 女鹿二〇〇〇年、並びに註(6) 女鹿二〇〇二年a前掲。

(128) 女鹿「第2部 北部東北地方におけるアイヌ語地名が意味するもの」『岩手県立博物館研究報告』第一四号「[釜石市・大槌町におけるアイヌ語地名について] 所収」(一九九七年、以下女鹿一九九七年aと称す)、並びに註(2) 女鹿一九九七年b前掲。

(129) このことについては、「山田秀三」アイヌ語族の居住範囲『北方の古代文化』(毎日新聞社、一九七四年)に示唆を得て、岩手県域の二広域地区において行った調査と考察の結果によっても検証される「女鹿・及川明彦「久慈地区のアイヌ語地名について」『研究年報白梅』第一号(岩手県立盛岡第二高等学校、一九九一年)、並びに女鹿・及川「第一号 釜石・大槌地区のアイヌ語地名について」『岩手県立博物館研究報告』第一四号「[釜石市・大槌町におけるアイヌ語地名について] 所収」[註(128) 前掲]。

(130) 金田一京助「山間のアイヌ語」『山岳』三三の一(一九三七年)。

(131) 土器様式を共有する要因には、民族例などから一般に通婚と交易関係が関与し、土器型式面での伝播には、文様などのデジタル型情報、並びに要素に分解できない全体のムードなどのアナログ型情報があり、デジタル型の伝播には言語が深く関わりとされる「上野佳也『縄文コミュニケーション—縄文人の情報の流れ—』(海鳴社、一九八六年)」。

また、縄文時代中期には、東北南半域を中心とする大木式、東北北半域から道南西部の円筒上層式、道北東部の北筒式の間には、アナログ型情報は伝わるも、デジタル型情報は伝わらなかったとして、その要因が言語の差異によるものとされる「上野前掲」。今日の国語方言のグループ化による検討からも、東北地方は、仙台の北と秋田県南部とを境界とする北半と南半とでは異質であり、両者は、長期間にわたって異なる文化圏にあったとされ「浅井亨『蝦夷語のこと』『日本古代文化の探究 蝦夷』(社会思想社、一九七九年)」、上野前掲は、国語学上の理解とも整合する。既に、東北北半域から道南西部にわたった「共通文化圏」は、相通じるアイヌ語系の言語をも共有していたとする理解を提起した「註(128) 女鹿一九九七年a、並びに註(2) 女鹿一九九七年b前掲」。

ただ、円筒式と大木式との差に対して、円筒式と北筒式との差は大き

なものとはいえないように思われ、全道に今日残る地名が、おしなべてアイヌ語か日本語によるものだけであることをも考え合わせると、道南西部と道北東部における言語を始めとする文化面での差異は、東北北半域と東北南半域との差異ほどに大きくはなく、言語は、ともにアイヌ語系であったと考えている〔註(6) 女鹿二〇〇二年 a 前掲〕。こうしたことから、「共通文化圏」「拡大文化圏」成立の背景には、言語を始めとする文化の共有、密接な通婚・交易関係があったと理解される。

(132) 註(6) 前掲。

(133) 註(6) 前掲。

(134) 註(64)、(65)、並びに辻秀人「報告 東北南部の古墳出現期の様相」『シンポジウムⅡ 東日本における古墳出現過程の再検討』(日本考古学協会新潟大会実行委員会、一九九三年)に拠った。

(135) 註(5) 女鹿二〇〇一年 a・b、註(6) 女鹿二〇〇二年 a 前掲。

#### 補註

「えみし」社会の紐帯を考える上で論じた独狩について、説明が不十分だったので若干の補足を加える。狩は、元来、胡地の犬を意味する語で、既述した『和名類聚抄』那波道圓校訂本などの註記も、これに従ったものと解される。既述した『延喜式』交易雑物が確立された九世紀を中心とする時期、オホーツク文化においては、確かにブタとともにイヌが飼養され、食用にも供されたことが知られている〔註(50) 菊池、一九七八年前掲〕。こうしたことから、独狩をイヌとみなす見解もある〔関口明「渡島蝦夷と毛皮交易」『日本古代中世史論考』(佐伯有清編、吉川弘文館、一九八七年)が、いかに異域の産とはいえ、イヌの皮が該期の日本社会に大きな付加価値を以て受け入れられたとは考え難い。

この他、近世後期成立の『松前志』がトナカイとするのに対して、海豹

(アザラシ)のアイヌ語名ゾカリが妥当とする見解もみられる〔北構保男「海獣捕獲文化とラッコ」『北海道考古学』第一六輯(一九八〇年)〕。しかし、これについても、『和名類聚抄』は独狩の項とは別に水豹をあげ、名古屋市博本の傍訓に「アサラシ」が見え、那波道圓校訂本も和名「阿左良之」に訓註しており、独狩をアザラシとする理解には従えない。

ラッコの骨類は、北海道オホーツク文化や擦文文化の遺跡から少数ではあれ出土しており、北部千島のオホーツク文化の遺跡からは多数出土するとされ〔北構前掲〕、オホーツク文化の北海道への進出について、ラッコを始めとする毛皮獣の捕獲を目的とするものとみなす理解も提起されている〔大塚和義「特集◎謎のオホーツク人が北海道に存在した 交易経済が生み出した驚くべき先進社会」『月刊 歴史街道』五月号(PH P 研究所、一九九八年)〕。やはり、中世日本社会において、皮が珍重されたラッコが、古代には一顧だにされていなかったとは考え難い。また、ラッコは、かつては襟裳岬以北の北太平洋に生息したとされる〔今泉吉典「ラッコ」『世界大百科事典』三一(平凡社、一九七二年)〕が、近世初頭、南部千島の北海道系アイヌは、自らラッコ猟を行うとともに、中部千島以北からカムチャツカ半島にわたってラッコ猟を行った千島アイヌからラッコの毛皮を入手し、日本側へ供給していたとみられ、日本近海では、中部千島ウルフ島以北が主たる猟場であった〔北構前掲〕。

以上をふまえ、小論は、独狩をラッコに比定するとともに、独狩皮が千島列島のオホーツク文化形成集団に由来するもので、道南西部擦文文化の主体である渡島「えみし」が、ともに擦文文化を担った道北東部集団を通じて入手し、出羽国衙や出羽・陸奥「えみし」などと交易した結果、将来された可能性について提起するものである。

(めが・じゅんや 岩手県立博物館学芸員)